

日本線虫学会ニュース

Japan Nematology News

目次

巻頭言(二井一禎)	1
事務局から	
日本線虫学会第11回大会への参加を	2
第27回ヨーロッパ線虫国際シンポジウム(XXVII ESN International Symposium)	
のご案内	2
日本線虫学会誌への投稿要請	3
2003年度日本線虫学会大会(第11回大会)のお知らせ	3
記事	
韓日合同応用動物昆虫学会大会に参加して	
- マツ材線虫病に関するシンポジウムの紹介 - (神崎 菜摘)	7

巻頭言

二井一禎(京都大学)

私が論文らしきものを最初に書いたのは学部1回生の昭和43年のことで、昆虫好きの友人と3人で復帰前の沖縄の八重山諸島を訪れ、石垣島の溪流昆虫を採集し、それを報告したものです。このテーマを提案したのはもちろん昆虫に詳しかったその友人なのですが、採集したサンプルを整理する過程で、仕事を押しつけられ、結局私がこの報告をまとめることになりました。全くの素人であった私が、曲がりなりにも報告をまとめることができたのは当時奈良女子大学理学部におられた水生昆虫学の2人の先生方による親切な指導があったことと、サンプルを観察するための場所や、顕微鏡を提供いただいた京都大学教養部のトビムシを専門とする先生のご厚意のお陰でした。大学に進学して間もない時期に、これら著

名な先生方と身近に接した経験は、その後の私に大いなる錯覚をもたらしました。

“自分も研究者になれるかも知れない”と。その後、35歳で出身研究室の助手として職を得るまで、なんとか挫折せずに研究を続けられたのは、この時の“錯覚”のお陰かもしれません。

この論文を書く作業の中で得たもう一つの収穫は、環境指標生物という考えとの出会いです。つまり、棲息している生物相を通して水の汚染程度を明らかにしようという考え方です。公害問題がかまびすしい時代に教養部学生時代を過ごし、生物学の視点から公害問題を研究できないかと考えていた私は、水生昆虫が水環境の指標となるのと同じように、陸上生物のなかにも土壌環境の指標になる生物がいるはずだと思いつき、様々な生物群の中で、適当なグループを探してみたものです。そこでたどり着

いたのが“線虫”という、何処にもいて、数も種類数もやたら多い生物だったのです。あちこちの土を採ってきて、その中の線虫相を調べると言う無謀な仕事を繰り返していましたが、当然のごとく、種類の多さとその同定の難しさに突き当たり、このテーマを継続することを断念せざるを得なくなりました。しかし、現在も私の線虫学の原点はここにあって考えています。

昨年、テネリフで開催された第4回国際線虫学会では D. W. Freckman らがコーディネーターを務める線虫の多様性のセッションを覗いてみました。彼らが扱っているテーマに強い関心を持ったからですが、線虫相を通して環境を理解するという若い頃の私の考えかたがまんざら突飛なものではなかったことを確認できたように思います。

最近、友人と土壤微生物生態学の教科書を編集しています。そこで気づいたことですが、微生物の研究者と言えども、菌類の専門家は菌類だけ、細菌の専門家は細菌だけに研究対象を限定しており、土壤微生物として両者を同等に扱っている研究者はほとんどおりません。まして、土壤動物にまで関心を向ける微生物の研究者は限られています。しかし、線虫学を専門とする私たちには、線虫だけに興味を向けているわけにはいかないと言う宿命があります。なぜなら、微生物は線虫の餌であったり、線虫の捕食者であったり、あるいはまた植物を攻撃する際の協同者であったり、その関係は切っても切れない密接なものだからです。土壤微生物を俯瞰する目を持つ研究者として新たな分野を切りひらく上で、線虫の研究者は一步先んじた立場にあるといえるかもしれません。

蛇足になりますが、私が最初に書いた論

文は「石垣島の水生昆虫」というタイトルのわずか3頁の報告です。図の中の番号としてカレンダーの中から切り取った数字を貼り込み完成させた苦勞を思いだします。しかし、私は今でもこの論文を業績リストの一番最初に置くことに秘かな誇りを感じています。

【事務局から】

1) 日本線虫学会第11回大会への参加を
詳細は大会事務局から案内されていますが、本大会は8月27日～29日に帯広市で開催されます。2日目の夜にはディスカッションセッション(十勝のワインとチーズが振る舞われます)があり、3日目には北海道の畑作地帯における線虫問題やそれらの克服をめざす研究現場を視察するエクスカッションも計画されています。多数のご参加をお待ちしております。

2) 第27回ヨーロッパ線虫国際シンポジウム(XXVII ESN International Symposium)のご案内

既に多くの会員の方々に ESN 会長の Teresa Bleve-Zacheo 氏から、標記会議の案内が届いていると思います。会議は欧州線虫学会(European Society of Nematologists: ESN)の主催により、2004年7月14～18日にイタリアのローマで開催されます。シンポジウムプログラム組織委員会は線虫学の多様な視点に向き合えるような広い機会を設けると共に、植物と線虫の相互関係の未来を討論するために、多数のパネルディスカッションを計画しているそうです。今後 <http://esn-symposium.ba.cnr.it> に詳細な情報が公開されますから、ご注目をお願いします。

3) 日本線虫学会誌への投稿要請

本誌 33 巻 1 号は 9 月上旬にお届けする予定ですが、手持ちの投稿論文数が十分でなく、2 号の発行に苦慮している状況です。会員の皆さまがお持ちのデータを是非線虫学会誌に発表して下さい。基礎から応用に関わる幅広い内容の論文を受け付けております。また、調査法に関わる研究ノートや短報、総説、和文の論文も大歓迎します。至急論文をまとめられ、投稿されるようお願い致します。なお、線虫学会誌は会員外の研究者にも開かれていますので、機会がありましたら会員外の近辺の研究者にも投稿のお声かけをお願いします。

2003 年度日本線虫学会大会 (第 11 回大会)のお知らせ

大会事務局

2003 年度日本線虫学会第 11 回大会を下記の通り開催します。多数の会員のご参加をお願いします。大会に関するお問い合わせは、大会事務局まで。

北海道農業研究センター畑作研究部
環境制御研究チーム 奈良部 孝
〒082-0071 北海道河西郡芽室町新生
Tel: 0155-62-9276, Fax: 0155-61-2127
E-Mail: narabu@affrc.go.jp

1. 会場 (P.11 参照)

大会：とかちプラザ 2F 視聴覚室
帯広市西 4 条南 13 丁目
(JR 帯広駅南口徒歩 3 分)
TEL：0155-22-7890
懇親会：ホテルノースランド帯広
北海道帯広市西 2 条南 13 丁目 3-1
TEL：0155-24-1234

2. 日程

8 月 27 日 (水)
13:00~14:00 総会
14:00~17:00 一般講演
18:00~20:00 懇親会
8 月 28 日 (木)
9:30~11:45 一般講演
13:00~16:30 一般講演
18:00~20:00 イブニングセッション
8 月 29 日 (金)
8:30~17:00 エクスカーション
「帯広市～更別村～中札内村～芽室町」

3. 参加費

大会参加費：
一般 2,000 円、学生 1,000 円
懇親会費：7,000 円 (当日参加も可能)
エクスカーション：3,000 円 (若干名追加可、要事前連絡)

4. 講演プログラム

8 月 27 日 (水)

【総会】 13:00~14:00
【一般講演】 14:00~17:00

(座長：奈良部 孝)

14:00 101 荒城雅昭・山口昌良*・小松崎将一* (農環研・*茨城大農) 不耕起・堆肥連用圃場の土壌線虫の多様性 (第 7 報) 茨城県黒ボク土畑圃場の主要土壌線虫識別のための形質一覧表
14:15 102 岡田浩明・門田育生 (東北農研) フィレンクス属線虫 2 種の増殖におよぼす餌糸状菌種と培地の種類の影響
14:30 103 伊藤賢治・乙部和紀・水久保隆之 (中央農研) 線虫行動観察のための微細加工基板の開発

(座長：水久保隆之)

14:45 104 萩原 愛・吉賀 豊司・近藤 栄造(佐賀大農) ネグサレセンチュウ3種の寄生に対する数種植物根の褐変反応の違い。

15:00 105 水越 亨・馬場真一*・松井 克行**・中川玲二**・樋口裕二***・山田 徳洋**** (上川農試・*網走農改普及セ・**十勝中部農改普及セ・***十勝北部農改普及セ・****十勝東北部農改普及セ)

北海道十勝地方における畑作物でのキタネグサレセンチュウ被害と対抗植物の効果。

15:15 106 山田英一・河合 勝*(雪印種苗・*十勝中部農改セ) 北海道におけるゴボウのネグサレセンチュウ類による被害。

(座長：吉賀豊司)

15:30 107 串田篤彦・植原健人・百田洋二(北農研) ジャガイモシストセンチュウ高密度畑における抵抗性バレイショ品種の収量特性。

15:45 108 福澤晃夫・中村友久・串田篤彦*・百田洋二*(道東海大・*北農研) トマト水耕廃液の土壌処理がジャガイモシストセンチュウ密度に与える影響。

16:00 109 福澤晃夫・伊藤匠太・垣添貴彦・西村弘行・副島 洋*・百田洋二** (道東海大工・*雪印種苗・**北農研) トマト根由来ジャガイモシストセンチュウ孵化促進物質の抽出・分離と活性。

(座長：岩堀英晶)

16:15 110 水越 亨(上川農業試験場) ニンニクに寄生するイモグサレセンチュウのジャガイモに対する病原性。

16:30 111 奈良部 孝(北農研) 緑肥クローバをコムギの前後作に用いたダイズ

シストセンチュウ密度低減効果。

16:45 112 Fabio Centurion, M.・奈良部 孝*・植原健人*・清水 啓

(JICA/CETAPAR・*北農研) パラグアイにおけるダイズ寄生線虫と防除。

〔懇親会〕 18:00~20:00

8月28日(木)

〔一般講演〕 9:30~16:30

(座長：小坂 肇)

9:30 201 秋庭満輝・石原 誠・佐橋憲生・佐々木峰子*・岡村政則*・富樫一巳** (森林総研九州・*林育セ九州・**広大総合科) 野外林分におけるマツノザイセンチュウ個体群のマイクロサテライトマーカーを用いた解析。

9:45 202 真宮靖治 マツ枯死木材中におけるマツノザイセンチュウ分散型4期幼虫の出現経過。

10:00 203 神崎菜摘・小林正秀*・野崎 愛*・二井一禎(京大院農・*京都林試) ミズナラ枯死材、及びカシノナガキクイムシ虫体から分離された線虫。

(座長：神崎菜摘)

10:15 204 吉田睦浩・*軸丸祥大(農環研・*広島林技セ) マツノマダラカミキリ幼虫から得られたシヘンチュウについて。

10:30 205 重松 学・吉賀豊司・近藤栄造(佐賀大農) 佐賀県内に生息する昆虫病原性線虫の検出と性質。

10:45 206 石川裕二・吉賀豊司・弘中満太郎・近藤栄造(佐賀大農) *Caenorhabditis japonica* 耐久型幼虫がベニツチカメムシから離脱する要因。

(座長：荒城雅昭)

11:00 207 小松博樹・吉賀豊司・近藤栄造(佐賀大・農) キク栽培圃場におけるネグサレセンチュウの分布とキクの被害.

11:15 208 下元祥史・下元満喜*(高知防除所・*高知農技セ) 高知県におけるネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウの分布.

11:30 209 佐野善一・岩堀英晶(九州沖縄農研) 中南部九州の耕地周辺林野におけるネコブセンチュウ類の分布特性.

(休憩 昼食 11:45~13:00)

(座長：岡田浩明)

13:00 210 岩堀英晶・佐野善一・奈良部孝*(九沖農研・*北農研) 従来のPCR-RFLP解析では同定・識別不可能な日本のネコブセンチュウ類.

13:15 211 鳥越博明・佐野善一*・岩堀英晶*・土井 修(鹿児島農試大島・*九沖農研) 奄美大島のヤエヤマアオキに発生したネコブセンチュウ(予報).

13:30 212 Mangalika, S. P. P. R., Yoshiga, T. and Kondo, E. (Saga Univ.) Morphological and biological characteristics of *Halicephalobus* sp. isolated from oyster mushroom compost in Sri Lanka.

(座長：北上 達)

13:45 213 百田洋二・串田篤彦・植原健人(北海道農研) トマト品種のタバコシストセンチュウに対する抵抗性について.

14:00 214 水久保隆之・竹原利明(中央農研) トマトの生育と線虫密度に及ぼすサツマイモネコブセンチュウ、トマト萎凋病菌、非病原性フザリウム菌の種間相互作用(予報).

14:15 215 立石 靖・佐野善一・佐藤健次・小林良次・服部育男・松岡秀道(九州沖縄農研) ギニアグラスの新品種「ナツコマキ」のネコブセンチュウ抑制効果.

(休憩 14:30~14:45)

(座長：佐野善一)

14:45 216 田場 聡・高江洲和子・大城篤・諸見里善一*(沖縄農試・*琉大農) 線虫捕捉菌を用いたサツマイモネコブセンチュウの防除.

15:00 217 北上 達・西野 実(三重科技振セ) パスツールシア菌懸濁液の土壌灌注処理によるサツマイモネコブセンチュウに対する孢子付着.

15:15 218 杉村和実・黒木修一*・阿万暢彦** (宮崎総農試・*北諸県農林振興局・**宮崎県営農指導課) 畑地における夏期湛水処理によるネコブセンチュウ防除効果.

(座長：皆川 望)

15:30 219 下元満喜(高知農技セ) 蒸気消毒によるネコブセンチュウの防除とその問題点.

15:45 220 西野 実・北上 達(三重科技振セ) メチオニン土壌灌注処理によるサツマイモネコブセンチュウ防除効果.

16:00 221 片瀬雅彦・久保周子・牛尾進吾(千葉農総研) フスマによる土壌還元消毒法の線虫防除と作用機構.

16:15 222 °浅川満彦・長谷川英男*(酪農大獣医・*大分医大医) 日本産野生鳥類と哺乳類から記録された寄生線虫類の概要について.

5. イブニングセッションのご案内

8月28日(木) 18:00~20:00

「帯広から世界の線虫研究を考える(仮題)」:今年海外の学会に参加された皆様、およびパラグアイから帰国されたばかりの清水氏からホットな話題を提供していただき、世界の線虫情報を共有し、我が日本の線虫研究はどうあるべきかを議論したいと思います。

韓国(釜山)、ロシア(ウラジオストック)、米国(イサカ)それぞれの学会参加者に口火を切ってもらい、あとは参加者の自由討論に任せます。持ち時間は特に定めず、北海道産のワインとチーズを友に気楽な集まりにしたいと思います。また、せっかくの自由討論時間なので、テーマを問わず飛び入りで議論をふっかけるのもOKです。皆さんの参加をお待ちしています。

6. エクスカーションのご案内

(まだ若干の空席があります)

8月29日(金) 8:30~17:00

8:15 「とかちプラザ」前(JR帯広駅側)集合

8:30 同 出発

9:00-10:00 十勝農協連 農産化学研究所
種苗施設 - 十勝管内で生産される小麦、豆類、馬鈴しょの種子供給業務
分析施設 - 飼料、土壌成分ならびに線虫検定や堆肥、植物体内部品質の分析

10:45-12:00 更別村ふるさと館
更別村および十勝農業の概要説明
線虫害軽減をめざした緑肥栽培 - 講演と展示圃場見学

12:15-13:30 中札内美術村(昼食、休憩)
園内散策、写真・絵画鑑賞(一部施設は有料)、おみやげ
十勝の食材を使った昼食(13:00~)

14:15-14:30 現地試験地(帯広市清川、芽室町上美生)

シストセンチュウ軽減を図ったクローバ栽培(帯広市)

ネグサレセンチュウ新規対抗植物を含む緑肥作物栽培試験(雪印種苗)

14:45-15:15 新嵐山展望台(芽室町中美生)

パッチワークの畑が見渡せる十勝平野の展望台、休憩

15:30-16:30 芽室町未来農業集団(ITを活用した農作業履歴の公開・産直販売等先進的な活動を続ける若手農家グループ)農作業の現場から、十勝農業を支える若手農家の生の声を聞く、収穫物の試食も?

17:00 JR帯広駅到着、解散

*その日のうちに移動される方は、とかち帯広空港発 20:30-羽田着 22:05 または JR帯広駅 17:46 発-札幌着 20:13(新千歳空港着 19:46)に乗れますが、それ以外の交通手段の方は帯広周辺にもう1泊必要です。

7. 講演者の方へのお知らせ

一般講演の講演時間は、1課題当たり15分(予鈴10分、2鈴12分、終鈴15分)です。講演者多数のため、時間厳守をお願いします。

PCプロジェクター利用の方は、初日のなるべく早い時間に受付に記録メディアをお渡し下さい。ファイル名は

「111narabu.ppt」のように講演番号+名前とさせていただきます。PCの操作担当者を配置します。ファイルはいったんハードディスクにコピーしますが、大会終了後にすべて消去します。講演終了後にメディアは返却します。

OHP のシート交換は各自行って下さい。操作助手が必要な方は受付時にお申し出下さい。

本大会の講演要旨は、日本線虫学会誌第 33 巻 2 号に登載する予定となっております。要旨の修正が必要な場合は、10 月末日までに下記宛に、修正した原稿をお送り下さい。

〒305-8687

茨城県つくば市松の里 1 番地

森林総合研究所 微生物研究領域内

日本線虫学会誌編集事務局

TEL: 029-873-3211 (内線 407, 429)

FAX: 029-873-1543

E-mail: nogura@ffpri.affrc.go.jp

【記 事】

韓日合同応用動物昆虫学会大会に参加して - マツ材線虫病に関するシンポジウムの紹介 -

神崎 菜摘 (京都大学)

本年 5 月 28 ~ 31 日、韓国、釜山において韓日合同応用動物昆虫学会議 2003 が催されました。会場となった海雲台 (ヘウンデ) グランドホテルは空港からバスで一時間ほど。海辺にある高級リゾートホテルで、普段ならこんなところには泊まれないとのことでした。この時、折しも SARS 騒ぎの真っ最中で、アジア地域での国際会議、学会が相次いでキャンセルされる中、本当に開催できるのかとやや不安でしたが、無事開催されました。

この会議は韓国応用昆虫学会と、日本応用動物昆虫学会の共催によるもので、レセプションパーティーの次の日にはフェアウェルバンケットという忙しいスケジュール

でしたが、10 件のシンポジウムセッション、8 つのオーラルセッションのほか、大会場でのポスターセッション、と、なかなかの盛況であり、日本線虫学会からも多数の参加がありました。わが研究室からは、二井現会長、大学院生の原直樹君、それから私、神崎が参加しました。

この学会でのシンポジウムセッションのひとつとして、韓国で近年拡大しつつあるマツ材線虫病被害に関するもの、「The problems and managements of pine wood nematode」が行われました。韓国でのマツ材線虫病は、1988年に釜山で最初の報告があったのち、被害材の人為的移動による飛び火的拡大と、媒介昆虫による短距離の拡大を繰り返して、現在までに、韓国南部全域に広がりつつあります。

学会開催地である釜山は、韓国でのマツ材線虫病初発地であり、韓国内ではこの病気に対する意識が最も高い地域です。このシンポジウムでは韓国側から 2 題、日本側から 4 題の合計 6 題の講演がありました。

シンポジウムは学会初日の午後から行われました。コーディネーターは韓国の Shin 博士と二井会長。真宮元会長の挨拶の後、最初の 2 題は韓国からの報告で、Korea Forest Research Institute (日本の森林総合研究所に相当?) の Chung 博士らによる韓国内におけるマツノマダラカミキリの生態的研究、同じく、Choi 博士らによる、韓国内におけるマツ材線虫病の分布拡大過程に関する研究が発表されました。

韓国でも、媒介昆虫は日本の場合と同様、マツノマダラカミキリであり、生態的に大きな違いはないとのこと。日本におけるカミキリを標的とした防除法の応用は、失敗例からの教訓も含めて、可能であろうと思われました。また、韓国においてのマツ材

線虫病の拡大過程に関する研究では、各被害地の被害の概要、各被害地内における被害拡大に関する詳細な観察事例が報告されました。この報告では、特定の被害木から、次年度の被害木への線虫の伝播に関する調査が行われておりました。このことは、韓国における本病の被害が、地域的にはかなり広がりつつあるのに対して、各被害地では、感染拡大を被害木単位で追跡できるレベルであるということを示しています。今のうちに的確な防除戦略をとることにより、韓国内での本病の拡大を封じ込めることができる可能性を示していると思えました。

続く4題は日本からの発表で、線虫感染に対する宿主マツの反応、日本における本病防除の成功例、マツノマダラカミキリの生活史とその線虫伝播様式、マツ材線虫病防除の可能性に関する研究がそれぞれ報告されました。

「線虫感染に対する宿主マツの反応」では、当研究室の原君が、マツ材線虫病における枯死メカニズムに関するこれまでの知見を、木部放射柔細胞の組織化学的变化に焦点を絞ってまとめてくれました。本病の枯死メカニズムはいまだ解明されておらず、この解明は本病防除においての最重要課題のひとつですが、今回の講演では、植物側の過敏感反応（過敏感細胞死）が暴走することによって起こる現象であるという仮説に基づいて枯死機構の説明がなされていました。今後、この仮説を裏付ける具体的データの蓄積が強く望まれるテーマであると思います。

森林総合研究所九州・中村博士による「日本におけるマツ材線虫病防除成功例」では、薬剤の空中散布、くん蒸処理による防除法の重要性が示されました。他の場所と隔離された島、あるいは周囲にマツ林が

ない地域に対して集中的に薬剤防除（空散、くん蒸）を行うことにより、その地域のマツ林を保護するというものでした。しかし、これまで、本病の防除が実際の場面で可能であるという認識が、ほんの一部の例外を除いてほとんどありませんでしたので、これだけの成功例があるのかと、驚かされました。現在の韓国におけるマツ材線虫被害に対して、この防除法はかなり有効なのではないか、もしかすると韓国のマツ材線虫病の拡大防止は可能なのではないかと、思える内容でした。

次の、線虫伝播様式に関する講演（広島大学・富樫教授）では、カミキリから寄主樹木への線虫伝播経路について、概説されました。一般に線虫のカミキリ虫体からの離脱はカミキリの後食時と産卵時に樹木への侵入として起こるということが知られていますが、これに加えて、カミキリ虫体間での線虫の移動が起きているということが示されました。これまでに、各カミキリ個体が保持する線虫の個体群構造が異なっているということが報告されています。線虫の移動分散に伴う個体群構造の変化という視点から見て興味深い話題であると感じました。

最後に、このシンポジウムのまとめ、として John Webster 博士（Simon Fraser 大学前教授）がマツ材線虫病防除の今後の可能性に関して講演されることになっておりましたが、学会直前に参加できなくなるというアクシデントがあり、急遽、共著者の二井会長が演者に。しかし、Webster 博士からスライドが届いたのが出発の前々日。実はかなり大変だったのです。この講演では、アジア地域における本病の被害と防除の現状、今後の防除、木材貿易のあり方が論じられました。

シンポジウム後はレセプションパーティーが行われたのですが、韓国では全体のパーティーは半ばで抜け出して後は個人で、というのが一般的とのこと。後半はシンポジウム演者・参加者で、ホテル近くの屋台で懇親会と相成りました。釜山は港町ということもあり、屋台には水槽があり、生きた魚介類（といっても魚はほとんどなく、貝類、タコ、ナマコその他正体不明の無脊椎動物たち、甲殻類はいたかな？）が動いておりました。宿泊したホテルでは、フロント、レストランでもほとんど日本語が通じていましたので、韓国到着後、ここにいたって初めて英語で会話をした、という感じでした。次の日にポスター発表を控えた森林総研・前原博士と私（ホテルが同室だったのです）は、講演の済んだ演者の皆様方

が大いにリラックスして（？）盛り上がっておられるのを横目に見ながら、ホテルに帰ったら準備の続きが、と（この期に及んで）思案しておりました。

なお、ザイセンチュウ、マツノマダラカミキリ関連のポスター発表は韓国から、2題、日本からは5題（森林総研・島津博士、前原博士、森林総研九州・中村博士、真宮元会長、私、神崎）がありました。

今回の学会に参加した実感として、韓国は思っていたよりも近いところでした。この学会（懇親会？）をきっかけに、今後、さらに交流を深めることができれば、という感想を持ちました。最後に写真のひとつも、と思ったのですが、わが研究室からの参加者、3人ともカメラを持って行っておりませんでした。失礼いたしました。

[編集後記]

4月の事務局体制変更により、ニュース編集を仰せつかりました。今回から北海道と九州の南北両端が編集を担当することになります。今号では大会案内を中心とした紙面になりましたが、こうした従来同様の情報に加えて、地域の関連イベントや研修会などの情報も積極的に取り上げ、活発な情報交換が交わされているNEMNETに負けない、読みたくなるような紙面編集に力を入れたいと考えています。ご協力をお願いいたします。

さて、当地熊本は、先週ようやくと梅雨明けしましたが、もう一つすっきりしません。連日35度以上を記録した昨夏を思うと、地球温暖化が軌道修正した感があります。私はこれで夏バテを免れそうだと期待していますが、線虫も陽熱処理や湛水にもめげずに越夏するのではないかと気になります。

(佐野善一)

本号からニュースの編集を担当することになりました北農研の串田です。どうぞよろしくお願いいたします。今年の大会は、北海道十勝地方での開催です。地方開催にもかかわらず、34タイトルの演題が集まりました。今年も実りのある大会になりそうです。エクスカージョンでは、北海道を代表する大規模畑作地帯を十分堪能して頂きながら、大規模畑作ならではの線虫対策を紹介することになっています。まだ、若干の空席があります。滅多にないチャンスだと思いますので、是非ご参加をおすすめいたします。

今年の北海道は、「夏に見捨てられた」状態が続いております。大会にお越しの際は、服装にご注意を。

(串田篤彦)

2003年8月12日
日本線虫学会
ニュース編集小委員会発行
編集責任者 佐野 善一
(ニュース編集小委員会)

農業技術研究機構
九州沖縄農業研究センター
地域基盤研究部線虫制御研究室
〒861-1192
熊本県菊池郡西合志町須屋2421
TEL : 096-242-7734
FAX : 096-249-1002
E-mail : sanoz@affrc.go.jp

日本線虫学会ニュース第30号
ニュース編集小委員会
佐野 善一(九沖農研)
串田 篤彦(北農研)

入会申し込み等学会に関するお問い合わせは、学会事務局：農業技術研究機構中央農業総合研究センター線虫害研究室まで
〒305-8666
茨城県つくば市観音台3-1-1
TEL : 029-838-8839
FAX : 029-838-8837
E-mail : aiba@affrc.go.jp